

《翻訳・注釈》

フォティオス『文庫』におけるクテシアス『ペルシア史』摘要

— キュロスからクセルクセスの治世まで —

阿 部 拓 児

(解説)

クニドス出身の歴史家クテシアスとは、現在われわれが手にする様々な証言史料 (Testimonia. **T**と略記) によれば、以下のような人物であった。クテシアスはクテシオコス (T1; T1b; T11h), もしくはクテシアルコス (T1) の息子であり、小アジア南西部の都市クニドスの出身であった (T1; T1b; T2; T3; T11h)。クニドスは当時ギリシア医学の中心地として知られていたが、クテシアスもまた医師であった (T1; T1b; T2; T3; T6aβ; T7a; T7d; T11d)。クテシアスは、ペルシア大王アルタクセルクセス2世にたいし、王弟の小キュロス (本稿の中心人物の一人である初代大王キュロスとは別人物) が反乱を起こした時代 (前401年) の人物である (T3; T5b)。彼は何らかの戦争に巻き込まれてペルシア帝国中央へ捕虜として連行された後、アルタクセルクセス2世と彼の母パリュサテイスのもとで医師として働いた (T1; T2; T3; T7a; T11d)。17年間をペルシア宮廷で過ごし (T1b; T3), おそらくは計略によって、ロドス経由でクニドス、そしてスパルタへと渡った (T7c; T7d)。エーゲ海世界に戻った後、『ペルシア史』 (T1; T1b; T2; T9; F1-F44b), 『インド誌』 (T10; T11f; T13; F45-52), 『アジアの貢納について』 (F53-54), 題名不明の周遊記 (F55-60) などを著した¹⁾。

多くの古典作品がそうであるように、クテシアスの著作群もまた、わずか一片のパピルス文書を除き²⁾, そのすべてが現在までに散逸してしまっている。しかし幸いなことに、クテシアスに続く古典作家たちが彼の著作に言及し、また摘要を作成したために、これら種々の断片史料 (Fragmenta. **F**と略記) を組み合わせることによって、クテシアス作品の全体像を把握することが可能となっている。それらによれば、『ペルシア史』は半ば伝説であるニノス、セミラミス時代のアッシリア史から始まり、アルタクセルクセス2世治世半ばで擱筆。23巻から成る。また、『インド誌』はインドの地誌・習俗について書かれ

1) もちろん、このようなクテシアスの経歴には大小様々な異論が呈されているが、これについては稿を改めて論じるべきであろう。さしあたっては、以下の諸研究を参照されたい。F. Jacoby (1922); T.S. Brown (1978); B. Eck (1990); M. Dorati (1995); C. Tuplin (2004), 319-321.

2) Cf. J.M. Bigwood (1986).

た1巻本とのことである。このうち『ペルシア史』については、クテシアスが『アッシュリア史』と『ペルシア史』を著したというストラボンの記述(T2)を考量するに、アッシュリアならびにメディアの歴史を取り扱った第1巻から第6巻(『アッシュリア史』)と、ペルシア史を論ずる第7巻から第23巻(狭義の『ペルシア史』)が、ときに独立して扱われていたようである。

クテシアス史書の引用作家のうち、もっとも重要な人物は、9世紀最高の学者にしてコンスタンティノーブル大主教であったフォティオスである。フォティオスは、弟タラシオス宛の手紙という体裁をとって、自らが読んだ書物について評した『文庫』なる書を著した³⁾。この第72項(Photius, *Bibliotheca*, 72, p. 35b35-50a4)で、彼はクテシアスの『ペルシア史』第7巻から第23巻、すなわち狭義の『ペルシア史』と『インド誌』の摘要を作成している。『ペルシア史』の一部分のみを断片的に引用している多くの作家とは異なり、フォティオスは狭義の『ペルシア史』全巻を概括的に要約しており、それゆえ現在では失われてしまったクテシアス『ペルシア史』の全体像を考察する上で、きわめて有益である。本稿では、かかるフォティオスによる摘要のうち、『ペルシア史』第7巻から第13巻まで(p. 35b-35-40a5)、すなわちキュロスからクセルクセスの治世(ただし、フォティオスの摘要はキュロスがメディア王アステュアゲスを降伏させる直前から始まっている)を扱った箇所を訳出する。この箇所は、クテシアスの先輩史家であるヘロドトスとその名著『歴史』で扱った時代と重なることから、クテシアス研究のみならずヘロドトス研究という観点からも意義深い⁴⁾。

底本は、一般に広く用いられてきたヤコービ編ではなく、近年出版されたランファン編のビュデ版を用いる⁵⁾。ランファン編はヤコービ編の増補、改定版という体裁をとっており、両編の史料番号は共通している。訳出にあたっては、アンリのフランス語訳、ランファンのフランス語訳、ウィルソンの英語訳、ならびにペルシア戦争にかんする箇所だけではあるが、藤縄の日本語訳を適宜参照した⁶⁾。なお、本文中、ゴシック体で印刷された見出しは、ランファン編を参考にしつつ、訳者が便宜的につけたものである。

3) フォティオスの経歴と『文庫』の一般的性格については、井上(1993)。

4) クテシアスとヘロドトスとの比較研究としては、D. Lenfant (1996) ; M. Melchert (1996) ; 藤縄(1989) などが挙げられる。

5) F. Jacoby (1958) ; D. Lenfant (2004)。

6) R. Henry (1947) ; R. Henry (1959) ; D. Lenfant (2004) ; N.G. Wilson (1994), 54-78; 藤縄(1989), 397-401。

(訳注)

序文

『ペルシア史』の構成と著者クテシアスの紹介

T8 クニドスのクテシアスの著作、23巻から成る『ペルシア史』を読んだ。最初の6巻で彼はアッシリアとペルシア以前の出来事を扱っている。だが、第7巻以降はペルシアについて詳細に記している。第7、8、10、11、12、13巻⁷⁾ではキュロス、カンビュセス、マゴス僧、ダレイオス、クセルクセスについて詳述し、ほとんどあらゆる点でヘロドトスと対立した記述をしている。クテシアスはヘロドトスを多くの点で嘘つきだと非難して、物語作家と呼んでいる。事実、クテシアスのほうが後代の人間である。クテシアスは記録したことのほとんどについて目撃者であったと、また目撃することが不可能な場合には、ペルシア人本人から自ら情報を得たと言っている。かくして彼は歴史を書いた。彼は、ヘロドトスにだけ反論しているのではない。いくつかの点でグリュッロスの息子クセノフォンとも齟齬をみせる⁸⁾。

クテシアスの盛年時代

T5b クテシアスは、ダレイオスとパリュサティスの息子、ペルシア王位を継承したアルトクセルクセス⁹⁾の弟であるキュロスの時代¹⁰⁾に盛年であった。

キュロスの治世

アステュイガスの降伏

F9 (1) さて、クテシアスはアステュアゲスについては、まず何よりも、彼とキュロスとは血がつながっていないという¹¹⁾。クテシアスはまた、アステュアゲスをアステュイガス

7) テオンは「クテシアスの第9巻」の記述としてフォティオスの摘要と同様の、サルデイス攻略作戦について記述している (F9b)。従って、ここで第9巻が省略されているのは、フォティオスもしくは写字生の単純な誤りであろう。

8) クテシアス『ペルシア史』とヘロドトス『歴史』およびクセノフォン『キュロスの教育』との齟齬は、大小あわせると、本稿のほぼ全文にわたり指摘できる。本稿でも、特に重要と思われる点については、それらの異同を指摘したい。

9) 前404年に即位したアルタクセルクセス2世のこと。一般にアルタクセルクセスと表記されるが、フォティオスの原文に従い (Ἀρτοξέρξης), 本稿ではアルトクセルクセスと表記した。

10) 小キュロスは、前401年、クナクサの戦いで戦死。従って、盛年を40歳前後と考えた場合、クテシアスは前440年頃、ヘロドトス (前480年頃の生まれ。Cf. 藤縄 (1989), 344) よりも半世紀ほど後の生まれということになる。

11) ヘロドトス『歴史』(1.107)およびクセノフォン『キュロスの教育』(1.2.1)によれば、キュロスは、メディア王アステュアゲスの娘マンガネと、当時メディアに従属していたペルシア人カンビュセスとの子であり、従ってアステュアゲスとは祖父と孫の血縁関係にある。しかし、クテシアス『ペルシア史』(F8d.3)によれば、キュロスは盗賊の父アトラダテスと山羊飼いの母アルゴステの子であり、アステュアゲスとは何ら血がつながっていない。Cf. R. Drews (1974); 森 (1976)。

とも呼ぶ。アステュイガスはキュロスの前から逃れてエクパタナへ行き、宮殿の「羊の頭」¹²⁾に隠れた¹³⁾。彼の娘アミュティス¹⁴⁾とその夫スピタマスがアステュイガスを匿った。キュロスは到着すると、アステュイガスを見つけ出すために、オイバラス¹⁵⁾に命じてスピタマスとアミュティス、さらには彼らの子供たちスピタケスとメガベルネスを拷問にかけて詰問するようにいった。アステュイガスは自分のせいで子供たちが拷問にかけられてはならないと、自ら名乗り出た。彼は捕えられると、オイバラスによってしっかりと足枷につながれたが、すぐ後にキュロス自身によって解放され、父親のごとく尊敬された。一方、娘アミュティスは、はじめ母親のように敬意を受けていた。しかし、夫スピタマス——彼はアステュイガス捜索にかんして、何も知らないと言ったのである——が処刑された後は、キュロスによって妻に迎えられた¹⁶⁾。クテシアスはキュロスについて以上のように記すが、これはヘロドトスの記述とは異なる。

バクトリア遠征

(2) キュロスはバクトリアに遠征したが、戦いの決着は着かなかった。バクトリア人たちは、アステュイガスがキュロスの父であると知り、アミュティスが母であり妻でもあると聞くと、すすんでアミュティスとキュロスに服従した。

サカイ人への遠征

(3) キュロスはサカイ人¹⁷⁾の地に遠征して、サカイ人の王アモルゲスを捕らえた。アモルゲスはスパレトラの夫でもあった。スパレトラは夫アモルゲスが捕まると、軍を集め、30万人の男子と20万人の女子の軍勢を率いてキュロスと戦った。スパレトラはキュロスを破り、多くの者たちとともに、アミュティスの兄弟パルミセスや彼の3人の子供たちを捕虜にした。その結果、パルミセスらと交換に、アモルゲスも解放された。

12) この語が何を意味しているかは不明だが、おそらく宮殿の一室の名だと思われる。D. Lenfant (2004), 257.

13) アステュイガス攻囲以前の、キュロスの立身出世譚は、ダマスコスのニコラオスによって詳細な摘要が作成されている (Nic. Dam. *FGrH* 90 F 66 = Ctes. F 8 d)。

14) ヘロドトス『歴史』では、マンダネ以外のアステュアゲスの子については、触れられていない。クセノフォン『キュロスの教育』では、キュアクサレスという名の、アステュアゲスの息子が登場する。

15) F 8 dから登場する、キュロスの腹心。

16) ヘロドトス『歴史』およびクセノフォン『キュロスの教育』では、アステュアゲスとキュロスの関係は、マンダネを介して、祖父と孫の血縁関係になるが、クテシアス『ペルシア史』では、アミュティスを介した義理の親子関係になる。Cf. 本稿の註11。

17) バクトリア北部に居住していた遊牧民。地図参照。

サルデイス攻略

(4) アモルゲスを同盟軍として、キュロスはクロイソスと都市サルデイスを攻撃した¹⁸⁾。オイバラスの計画で、ペルシア人の姿をした木像が城壁の上に掲げられると、住民は恐怖に陥り、都市は占領された¹⁹⁾。神霊が現れてクロイソスを惑わしたために、占領前に²⁰⁾クロイソスの息子は捕虜として捕らえられたという。クロイソスがよからぬことを考えたので、息子が目の前で殺された²¹⁾。そして息子の母はこの不幸を目の当たりにすると、城壁から投身自殺をした²²⁾。

クロイソスの処遇

(5) サルデイス占領後、クロイソスは市域にあるアポロンの神殿に逃れた。神殿内で3度キュロスに足枷につながれたが、3度とも気付かれずに逃れた。たとえ神殿の扉が封印されていて、オイバラスが監視の任に当たっていても、逃げた。クロイソスと一緒につながれていた捕虜たちは、彼らがクロイソスを逃がすという裏切り行為をしたとして、打ち首にされた。クロイソスは宮殿に連行され、もっと嚴重につながれた。しかし、雷と嵐が巻き起こると、彼は再び逃げ出し、ついにキュロスによってしぶしぶ解放された²³⁾。それからキュロスはクロイソスを厚遇して、彼にエクバタナ近郊のバレネという大都市——5000人の騎兵と1万人の軽装歩兵、投槍兵、弓兵が駐屯していた——を与えた。

アステイガスの死

(6) それから、キュロスが宦官ペテサカス——彼はキュロスのもとで有力であった——をペルシアに遣わして、バルカニア人²⁴⁾の地からアステイガスを連れ出したことについて、

18) ヘロドトス『歴史』(1. 153)では、サルデイス攻略の後に、バクトリア人、サカイ人にたいし遠征がおこなわれており、クテシアス『ペルシア史』とは順序が逆転している。

19) ヘロドトス『歴史』(1. 84)では、キュロス軍は策略を計ることなく、もっとも険しい断崖を登攀して、アクロポリスを占領している。

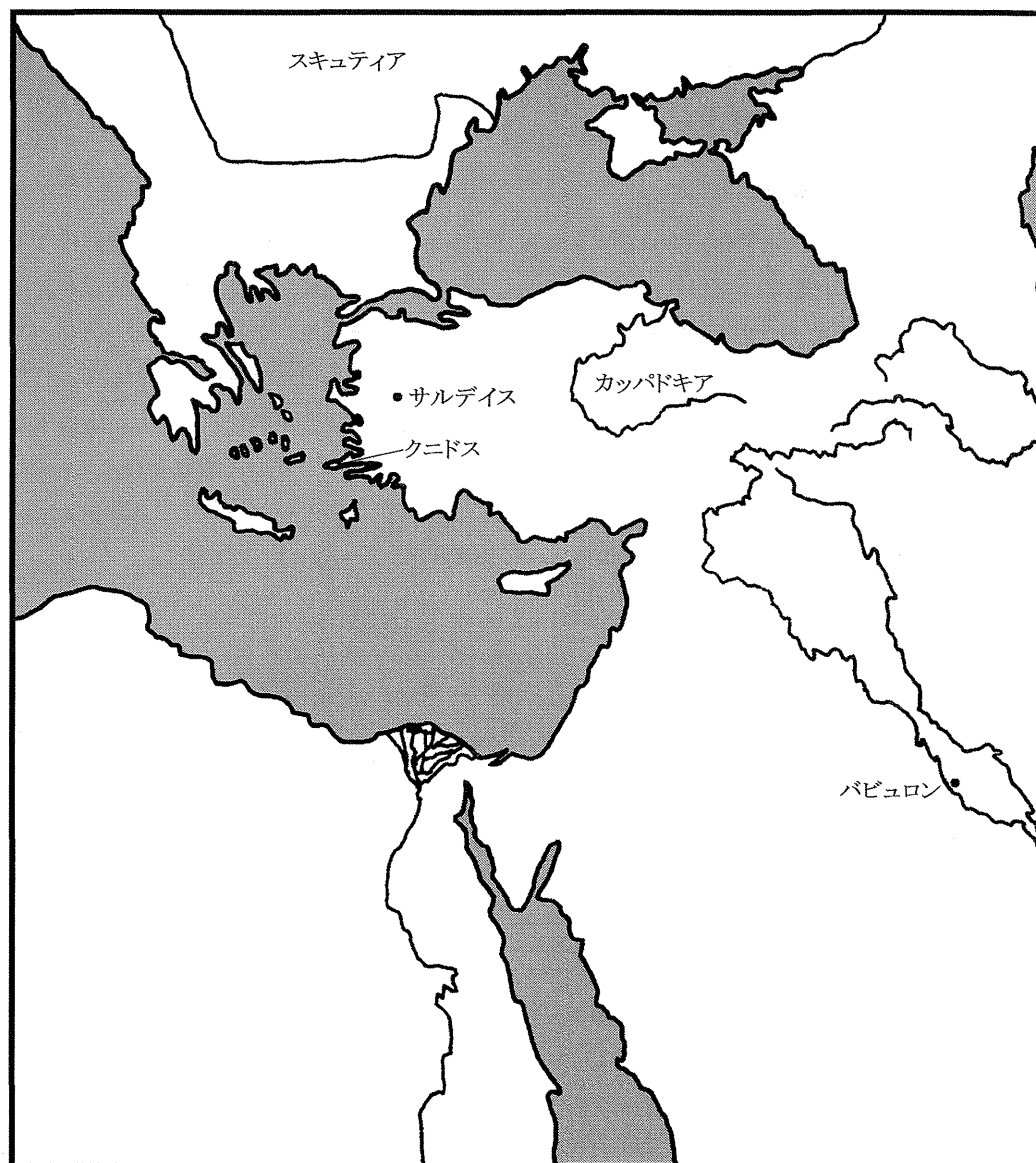
20) ここでは、記述の時系列が明らかに逆転している。

21) ヘロドトス『歴史』では、クロイソスの息子は二人登場するが、サルデイス攻略の過程で殺されることはない。一人は、サルデイスが占領される2年前に、野猪狩りの際に誤って槍に刺されて死ぬ(1. 43)。もう一人は、それまで啞であったのだが、サルデイス占領の際に初めて声を発し、それによってクロイソスを助ける(1. 85)。

22) この節は、フォティオスが大幅な要約をしているため、文脈が不明瞭になっている。

23) ヘロドトス『歴史』(1. 86-87)では、サルデイス陥落後、キュロスは巨大な薪を積み上げ、クロイソスを火刑に処そうとする。火が放たれた後、キュロスはクロイソスから、クロイソスが以前ソロンと交わした幸福にかんする哲学的会話の内容を聞き、人の世の無常を知ると、火刑を中止しようとした。火はすでに、人の手によっては消せないほどの勢いに達していたのだが、突如激しい雨が降ったことにより鎮火する。命拾いをしたクロイソスは、以後キュロスの参謀として活躍する。またクセノフォン『キュロスの教育』(7.2. 9-29)では、火刑や脱走のエピソードはなく、キュロスはクロイソスとの対話に動かされ、彼を寵臣として重んじるようになる。Cf.阿部(2006)。

24) 正確な居住地は不明。地図参照。





D. Lenfant (2004), 404-5を参考にして作成。

クテシアスは筆を進める。というのも、キュロスもアステュイガスの娘アミュティスも父親に会いたがっていたからである²⁵⁾。オイバラスはペテサカスに指示して、アステュイガスを砂漠に放置し、飢えと渇きで殺すようにいった。これは実行された²⁶⁾。夢によってこの罪が明らかになると、アミュティスはペテサカスに復讐するために、彼の身柄を引き渡すように何度も要求し、キュロスはそれに応えた。アミュティスはペテサカスの目玉を抉り出し、皮膚を剥ぎ、磔刑に処した。

オイバラスは、たとえキュロスがそのようなことは許さないと強く言っても、ペテサカスと同じ目にあうのではないかと恐れ、10日間断食し、自殺した。アステュイガスは立派に葬られた。彼の遺骸は砂漠で野獣に食べられることなく、そのままの姿で残っていた。というのも、クテシアス曰く、ペテサカスが回収しに戻ってくるまで、ライオンが遺骸を守っていたのだという。

デルビケス人への遠征

(7) キュロスはデルビケス人²⁷⁾の地に遠征した。アモライオスが彼らの王であった。デルビケス人の伏兵部隊が象を駆り立て、キュロス軍の騎兵を追い払った。キュロス自身も落馬し、あるインド人（というのもデルビケス人はインド人と同盟していて、彼らから象を手に入れた²⁸⁾）が地面に倒れていたキュロスを襲い、腰の下あたりの腿を槍で突いた。キュロスはその傷がもとで死んだ²⁹⁾。だが、攻撃されて間もなくは、まだ息があったので、側近がキュロスを抱きかかえ、自陣へ運んだ。その戦争で多くのペルシア人が死に、同様にデルビケス人も死んだ。彼らの死者もその数、実に1万にも上った。

アモルゲスはキュロスの様子を聞くと、2万人のサカイ人騎兵とともに急いで到着した。そこで、ペルシア軍とデルビケス軍の戦闘が勃発し、ペルシア人とサカイ人の連合軍が奮

25) Cf. F.9.1; 本稿の註16。キュロスはアステュイガスの娘アミュティスを妻としている。

26) ヘロドトス『歴史』(1.130)とクセノフォン『キュロスの教育』(1.5.2)は、アステュアゲスの死因を明記していないが、おそらく自然死だと想像できる。ただし、死亡の時期は異なっており、『歴史』ではキュロスによるメディア征服後、『キュロスの教育』では、キュロスがメディアの支配権を受け継ぐ以前に、アステュアゲスは死去している。なお、『キュロスの教育』では、キュロスはメディアを征服するのではなく、アステュアゲスの孫娘と結婚することにより、平和的にメディアの支配権を受け継いだことになっている。

27) カスピ海東方に居住。地図参照。

28) クテシアスはインドの象について言及した最初の古典作家である (Cf. F.45.10; F.45b)。ヘロドトスは、アフリカには象が棲息すると伝えているが (4.191)、インドの象については触れていない。Cf. J.M. Bigwood (1993)。

29) ヘロドトス『歴史』(1.214)では、キュロスはマッサゲタイ人との戦いで戦死しており、遺言はない。クセノフォン『キュロスの教育』(8.7)では、キュロスは天寿を全うし、息子たちへの遺言を残している。クテシアス『ペルシア史』におけるキュロスの死は、戦死という点では『歴史』と、遺言を残しているという点では『キュロスの教育』と類似している。なお、マッサゲタイ人はカスピ海の東方に居住しており (Hdt.1.204)、デルビケス人の居住地に近い。

闘して勝利した。デルビケス人の王アモライオスと彼の2人の息子たちは殺された。3万人のデルビケス人と9000人のペルシア人が死に、デルビケス人の国はキュロスに降伏した。

キュロスの遺言

(8) 死の直前、キュロスは長男カンビュセスを王にし、弟タニョクサルケス³⁰⁾をバクトリア人、コラムニア人³¹⁾、バルティア人、カルマニア人³²⁾の地の支配者にして、これらの地域に免税特権を定めた。スピタマス³³⁾の子供たちにかんしては、スピタケスをデルビケス人の、メガバルネスをバルカニア人³⁴⁾のサトラペスに任命した。キュロスは子供たちに、あらゆる点で母に従うように命じ、アモルゲスとの友好関係を握手による盟約で結ばせた。互いに良好な関係を維持する者たちは幸あれと祈り、不正に手出しした者たちは呪わんと言った。これだけ言うと、彼は傷を受けてから3日後に死んだ。治世は30年間であった³⁵⁾。ここで、クニドスのクテシアスの第11巻が終わる。

カンビュセスの治世

カンビュセスの即位

F13 (9) 第12巻はカンビュセスの即位によって始まる。カンビュセスは王位に就くと、父親の遺骸を葬るために、宦官バガパテスを遣ってペルシアに運び、その他も父親が定めたように取り仕切った。ヒュルカニア人³⁶⁾アルタシュラスはカンビュセスのもとでもっとも有力であり、宦官の中ではイザパテス、アスパダテスやバガパテス——彼はベテサカスの死後、キュロスのもとでも力を持っていた——が有力であった。

エジプト遠征

(10) カンビュセスは、アミュルタイオスが王として支配していたエジプトに遠征し、アミュルタイオス³⁷⁾を破った。エジプト王の有力宦官コンバフィスが、エジプト総督の地位を条件に、橋をキュロス側に明け渡すなど、その他もエジプトの国益を裏切ったのである。というのも、これらのことについてカンビュセスがコンバフィスのいとこイザパテスを通

30) ヘロドトス『歴史』(3. 30)では、カンビュセスの弟の名はスメルデイス。クセノフォン『キュロスの教育』(8. 7. 11)ではタナオクサレス。

31) 中央アジアのステップに居住。地図参照。

32) イラン高原南部に居住。地図参照。

33) 王妃アミュティスの前夫。Cf. F 9. 1.

34) 正確な居住地は不明。地図参照。Cf. F 9. 6.

35) ヘロドトス『歴史』(1. 214)によれば、治世は29年間。

36) カスピ海東方に居住。地図参照。

37) ヘロドトス『歴史』では、遠征計画段階でのエジプト王はアマシスであったが(3. 1), 遠征時にはアマシスは死去していたため、戦争はアマシスの子プサンメニトスとの間におこなわれた(3. 10)。

して申し合わせたため（カンビュセスも後に自ら口頭で確認した）、こうなったのである。カンビュセスはアミュルタイオスを捕虜にしたが、何ら危害を加えることはなく³⁸⁾、ただ、彼が自身で選んだ6000人のエジプト人とともにスサに移住させた。カンビュセスは全エジプトを支配下に置いた。この戦争で5万人のエジプト人と7000人のペルシア人が死んだ。

マゴス僧スフェンダダテスの陰謀

(11) あるマゴス僧（名はスフェンダダテスといった）——彼は過失を犯し、タニユオクサルケスによって鞭打たれた——がカンビュセスのもとを訪れて、王に対して謀反を企んでいると王弟タニユオクサルケス³⁹⁾を中傷した。叛心の証拠として、もしタニユオクサルケスを招呼しても、彼は参じないであろうとも述べた。さてカンビュセスは弟を呼び寄せた。しかし弟は別に用事があったために、その場に残っていなければならなかったので、召集に遅れた。マゴス僧はもっとおおっぴらに彼を中傷した。王母アミュティス⁴⁰⁾はマゴス僧の話すことを怪しいと思い、息子カンビュセスに耳を貸さないよう忠告した。カンビュセスは信じていない振りをしていたが、そのじつ完全に信じていた。

王弟タニユオクサルケスの死

(12) カンビュセスが3回目に弟を呼びつけると、弟はやって来て彼に挨拶をした。それにもかかわらず、王は弟を殺害しようと、アミュティスに知られないよう計画を実行に移そうとした。ことは極まった。マゴス僧は王と共謀して⁴¹⁾、次のように計画した。マゴス僧はタニユオクサルケスとまったく同じ背格好だったので、王に次のように具申した。王弟を公然と非難したという理由で、公衆の面前でマゴス僧の打ち首を命じ、その一方でタニユオクサルケスを暗殺し、マゴス僧が王弟の服を着れば、衣装から彼はタニユオクサルケスと思われるであろうと。この計画は実行された。タニユオクサルケスは牡牛の血を飲み干して殺され⁴²⁾、マゴス僧はタニユオクサルケスの服を着て、周囲の人々も彼のことをタ

38) ヘロドトス『歴史』(3.14-15)では、カンビュセスは捕虜になったエジプト王ブサンメニトスに、奴隷の格好をさせた彼の娘や刑場に連行される息子の姿をみせつけるなどして、辱める。その後、ブサンメニトスはいったん解放されたが、ペルシアにたいする反乱計画が暴露したために、牡牛の血を飲んで自殺する（Cf. 本稿の註42）。

39) ヘロドトス『歴史』(3.30)では、王弟の名はスメルディス。

40) ヘロドトス『歴史』(2.1; 3.2)では、カンビュセスの母は、アカイメネス家のバルナベスの娘カッサンダネ。

41) ヘロドトス『歴史』では、カンビュセスとマゴス僧は共謀しておらず、王弟暗殺はカンビュセスの独断で決行された。エジプト遠征中、エチオピア王から贈られた大弓を王弟スメルディスのみが引けたことに嫉妬したカンビュセスは、スメルディスを本国に帰還させた後、腹心プレクサスベスに暗殺させた（3.30）。この事実を知ったマゴス僧パティゼイテスは、弟のマゴス僧スメルディス（彼は王弟と同名で、姿格好も似ている）を王弟になり代わらせて、王位を篡奪した（3.61）。

42) 牡牛の血は、すばやく凝結することから窒息を引き起こすと考えられていた。Cf. Hdt. 3.15; Plut. Them. 31.

ニュオクサルケスその人だと勘違いしていた。

スフェンダダテスの変装と王母アミュティスの死

(13) しばらくの間、誰にも気付かれなかったのであるが、アルタシュラス、バガパテス、イザパテスは別であった。というのも、彼らにだけはカンビュセスが事情を打ち明けていたのだ。カンビュセスは他の者たちといっしょにタニュオクサルケスの宦官長であったラビュコスと呼んだ。彼は着飾って座っていたマゴス僧を指して「お前はこの男がタニュオクサルケスだと思うか」と尋ねた。ラビュコスは驚いて「他の誰だと思うのでしょうか」と答えた。このように側近の者を騙せるほどに、マゴス僧の資格好はタニュオクサルケスに似ていたのである。それからマゴス僧はバクトリアに派遣され⁴³⁾、そこでタニュオクサルケスのごとく、すべてを取り計らった。5年が経ち、アミュティスはこの出来事を宦官ティベテオスから告げられたのだが、マゴス僧スフェンダダテスはこの宦官を刺殺した。彼女は、カンビュセスのもとからマゴス僧スフェンダダテスと呼びつけた。しかし、カンビュセスが彼を手放さなかったため、彼女はカンビュセスを呪いながら、毒を仰いで死んだ。

カンビュセスの死

(14) カンビュセスは供犠を捧げたが、犠牲獣が血を流さなかったため、落胆した。彼の妻ロクサネ⁴⁴⁾が頭のない子を産んだため、彼はさらに落胆した。マゴス僧たちは、彼は王位継承者を残さないであろうと、その前兆の説明をした。母が夜、夢枕に立ち、弟を殺したことについて脅したため、カンビュセスはますます落胆した。彼はバビュロンに行き、気晴らしにナイフで木切れを彫っていると、筋肉に届くぐらいに腿をナイフで切ってしまう、11日後に彼は死んだ⁴⁵⁾。治世は18年間であった⁴⁶⁾。

マゴス僧スフェンダダテスの王位篡奪時代

マゴス僧スフェンダダテスの王位篡奪

(15) 宦官バガパテスとヒュルカニア人アルタシュラスはカンビュセスが死ぬ前に、マゴス僧スフェンダダテスを王にしようと計画した。カンビュセスが死ぬと、彼は王になった。

43) 王弟タニュオクサルケスは、バクトリアを支配していた。Cf. F 9. 8.

44) マゴス僧たちが王位継承者について語っているところから推すと、王妃だと考えられる。ヘロドトスはカンビュセスの王妃としてアトッサともう一人の女性の存在を述べるが(3. 31)、ロクサネの名は言及していない。

45) ヘロドトス『歴史』(3. 64)では、カンビュセスは、エジプトからペルシアに帰還する途上のシリアで死亡。マゴス僧メルデシスの反乱を聞き知り、急いで馬上に飛び乗ったが、その際に鞆が外れて抜き身になった刀が太ももに刺さり、その傷が原因で死亡した。傷を負ってから、20日間ほど存命している。

46) ヘロドトス『歴史』(3. 66)によれば、治世は7年と5ヶ月間。

宦官イザバテス⁴⁷⁾はカンビュセスの遺骸をペルシアへ運んだ。マゴス僧スフェンダダテスがタニユクサルケスの名で統治しているときに、イザバテスはペルシアから戻り、すべてを陸軍に告発し、彼を引きずり出し、自分は聖域に逃れたが、そこで捕えられて打ち首にされた⁴⁸⁾。

ダレイオスらによるマゴス僧への蜂起

(16) その後、7人のペルシア人貴族がマゴス僧スフェンダダテスにたいし手を組んだ。7人とはオノファス、イデルネス、ノロンダバテス、マルドニオス、バリッセス、アタフェルネス、そしてヒュスタスベスの息子ダレイオスであった⁴⁹⁾。彼らが互いに信義を宣言すると、アルタシュラス、それにバガパテスも仲間に加わった。バガパテスは宮殿のすべての鍵を持っていた。バガパテスのおかげで7人は宮殿に入ると、マゴス僧がバビュロニア人の妾と同衾しているところを発見した⁵⁰⁾。彼らをみると、マゴス僧は跳び上がったが、武器がまったく見当たらなかった⁵¹⁾（というのもバガパテスがこっそりとすべての武器を持ち出していたのだ）、マゴス僧は金の腰掛け⁵²⁾を壊して、その脚を手にとって戦った。しかし結局、彼は7人に刺されて死んだ。治世は7ヶ月であった⁵³⁾。

王の選出とダレイオスの策略

(17) 日の出とともに、ダレイオスの馬が策略と工夫によって最初にいないたので、あらかじめ互いに取り決めていたことに従い、7人の中からダレイオスが王になった⁵⁴⁾。

47) カンビュセスの有力宦官の一人で、エジプト征服時に活躍した。Cf. F 13. 9; F 13. 10.

48) ヘロドトス『歴史』(3. 74-75)では、王弟スメルディスを暗殺したブラクサスベス自身が(Cf. 本稿の註41)、マゴス僧の王位僭称を暴露する。ブラクサスベスは真実を明かした後、投身自殺する。

49) ヘロドトス『歴史』(3. 70)では、7人の名はオタネス、アスパティネス、ゴブリュアス、インタフレネス、メガビュゾス、ヒュダルネス、そしてヒュスタスベスの子ダレイオスである。

50) ヘロドトス『歴史』(3. 78)では、7人が突入した際、マゴス僧兄弟(Cf. 本稿の註41, 48)は、真実を暴露されたことの対策を検討していた。

51) ヘロドトス『歴史』(3. 78)では、マゴス僧兄弟は槍と弓矢で応戦する。

52) ペルシア大王が金の椅子を使っていたという逸話は、クテシアスの後に『ペルシア史』を著した前4世紀のギリシア語史家デイノンの記述にも確認できる(Deion, *FGrH* 690 F 26)。

53) ヘロドトス『歴史』(3. 67)でも、治世は7ヶ月間。

54) ヘロドトス『歴史』(3. 84-87)に詳しい。それによれば、6人のペルシア人貴族は(7人のうちの一人オタネスは王位を辞退している)一同騎乗して遠出をし、日の出とともに最初にいないた馬の主が王位に就くことを取り決めた。ダレイオスの馬丁オイバレスは、ダレイオスの馬が気に入っていた雌馬の臭いを嗅がせることにより(嗅がせ方には二通りの伝承がある)、最初にいないたことに成功した。これにより、ダレイオスは王位に就く。

マゴス殺しの祭

(18) ペルシア人は、マゴス僧スフェンダダテスが殺された日に、マゴス殺しの祭を祝う⁵⁵⁾。

ダレイオスの治世

ダレイオスの墓の造営

(19) ダレイオスは滑らかな山に⁵⁶⁾ 自分の墓を造るように命じた。墓が完成すると、ダレイオスはそれをみたいと願ったが、カルダイア人と両親にいさめられた。代わりにダレイオスの両親が登ることを望んだが、両親を引き上げていた司祭たちが蛇⁵⁷⁾ をみておののき、綱を手放したので、両親たちは転落して死んだ。ダレイオスは大いに嘆き、綱を引いていた40人の首を刎ねた。

スキュティア遠征

(20) ダレイオスはカッパドキアのサトラペス、アリアラムネスに命じて、スキュティアに渡り、男も女も捕虜とするようにいった⁵⁸⁾。アリアラムネスは五十櫓船30隻で渡り、彼らを捕虜にした。スキュティア王の兄弟マルサゲテスも捕らえた。マルサゲテスは、悪事を働いたことにより自分の兄弟であるスキュティア王によって繋がれていたところを発見された。スキュティア王スキュタルケス⁵⁹⁾ は怒ってダレイオスに不遜な内容の書簡を送ったが、ダレイオスも同じ調子の返事を送った⁶⁰⁾。

ダレイオスのスキュティア親征

(21) ダレイオスは80万の軍隊を招集し、ボスポロス海峡とイストロス河⁶¹⁾ に架橋して、ス

55) ヘロドトス『歴史』(3. 79) に詳しい。祭の日には、一般のペルシア人は盛大に祝うが、マゴス僧たちは戸外に姿を現すことを禁じられているという。

56) 写本では「二重の山に ἐν τῷ δισσοῦ ὄρει」。ダレイオスの墓所の「岩は滑らかであった」というディオドロスの記述(12. 71. 7)を考慮して、ここではランファンの校訂「滑らかな山に ἐν τῷ λισσοῦ ὄρει」に従った。

57) この箇所には写本の欠落があると考えられる。A写本のみ、この欠落を埋めるために「蛇 ὄφεις」を補う注を付している。アンリはこの欠落を埋めていないために、司祭たちが両親をみておののいたかのごとく訳しているが、これでは意味が通らないであろう。R. Henry (1947), 25; R. Henry (1959), 113. 本稿では欠落を埋めたランファンの校訂に従った。

58) ヘロドトス『歴史』(4. 1) では、ダレイオスによる親征以前に、スキュティア遠征はおこなわれていない。

59) スキュタルケス(Σκυθάρχης)とは、ギリシア語で「スキュティアの指導者」という意味。ヘロドトス『歴史』(4. 126)には、スキュティア王イダントュルソスなる人物が登場する。

60) ヘロドトス『歴史』では、手紙の交換はおこなわれていない。しかし、ペルシア軍と真正面から戦おうとはせず、逃亡を続けるスキュティア軍にたいし、ダレイオスが挑発的な発言をすると、スキュティア王イダントュルソスが不遜な返答をするという場面がある(Hdt. 4. 126-127)。

61) 現在のドナウ河。

キュティアに侵入し、15日間⁶²⁾ 進軍した。ダレイオスとスキュティア王は互いに弓を贈りあった⁶³⁾。スキュティア王が贈った弓のほうが強かった。それゆえ、ダレイオスは引き返し、橋を渡ると、全軍が渡りきる前に急いで橋を落とした。ヨーロッパに置き去りにされた8万人の軍隊が、スキュタルケスの手にかかり死んだ⁶⁴⁾。ダレイオスは橋を渡ると、カルケドン人の家屋と神殿に火をつけた。というのも、住民たちが彼らの側にあった橋を落とそうとしたから、またダレイオスが途中、渡河のゼウスを祀って建てた祭壇を、カルケドンの住民が破壊したからである。

ダティスのギリシア遠征

(22) ダティス⁶⁵⁾ はメディア艦隊を指揮してポントスから帰還すると、島嶼部とギリシアを荒らした。マラトンではミルティアデスが会戦して、バルバロイを破った。ダティス自身は斃れたが、ペルシア人が要求しても、彼の遺骸は返還されなかった。

ダレイオスの死

(23) ダレイオスはペルシアに戻り供養を執り行い、30日間病床にあった後、他界した。72年生き、治世は31年間⁶⁶⁾。アルタシュラスも死んだ。宦官バガパテスも、7年間ダレイオスの墓守をした後、他界した⁶⁷⁾。

クセルクセスの治世

ダティスのギリシア遠征

(24) ダレイオスの息子クセルクセスが登極し、アルタシュラスの子アルタパノスが、父が先王のもとの振るったがごとく、クセルクセスのもとの権力を持った。大マルドニオス⁶⁸⁾

62) ヘロドトス『歴史』(4. 98; 4. 136) では、スキュティア親征は少なくとも60日間にわたっておこなわれた。

63) ヘロドトス『歴史』(4. 131) では、贈り物の交換はなされないが、スキュティアの諸王から小鳥、鼠、蛙と5本の矢が、ダレイオスのもとへ送り届けられた。

64) ヘロドトス『歴史』(4. 135-136) によれば、スキュティアに置き去りにされた兵士たちは、ダレイオスが失っても惜しくないと思なした弱兵たちであった。彼らはスキュティア王に投降するが、その後の運命については明らかにされていない。

65) メディア出身の軍人 (Hdt. 6. 94)。以下、ペルシア戦争の記述にканして、ヘロドトス『歴史』とクテシアス『ペルシア史』との間に齟齬が多々確認できるが、それらについては、本稿の註77を参照されたい。

66) ヘロドトス『歴史』(7. 4) によれば、治世は36年間。

67) ヒュルカニア人アルタシュラスと宦官バガパテスは、本来はカンビュセスの有力家臣であった (F 13. 9)。カンビュセス死後は、いったんマゴス僧スフェンダダテスを王に擁立するが、ダレイオスら7人が蜂起するとスフェンダダテスを裏切り、彼らを支援した (F 13. 15-16)。

68) この大マルドニオスに対応する「小マルドニオス」なる人物は、クテシアス『ペルシア史』に登場しない。あるいは「老マルドニオス」という意味かもしれない。ヘロドトス『歴史』(6. 43) では、マルドニオスは7貴族の一人、ゴブリュアスの子であり、年若い人物として紹介される。また、クセルクセスの従弟 (同時に義理の弟) にあたり、ギリシア遠征に積極的ではないクセルクセスを説得する主戦派として描かれている (7. 5-6)。

も有力であった。宦官の中ではナタカスが有力であった。

クセルクセスはオノファスの娘アメストリスと結婚し、子ダレイアイオス、その2年後に第二子ヒュスタスパス、それからさらにアルトクセルクセス、2人の娘——そのうち一人は祖母の名を取ってアミュティス、もう一人はロドグネ——が生まれた⁶⁹⁾。

ギリシア遠征の口実

(25) クセルクセスはギリシアに遠征した。その理由としては、前述したようにカルケドン人が橋を落とそうとしたこと、ダレイオスが建てた祭壇を破壊したこと、またアテナイ人がダティスを殺し、遺骸を返還しなかったことが挙げられる。

バビュロンの反乱

(26) しかしまず、クセルクセスはバビュロンに行き、ベリタナスの墓をみようとした。マルドニオスのおかげで彼は墓をみることはできたが、書かれているように、油でくぼみを満たすことはできなかった⁷⁰⁾。

クセルクセスはエクパタナに向けて進軍したが、バビュロニア人が反乱し⁷¹⁾、その地の将軍ゾピュロスが彼らに殺害されたという報を耳にした。

これらの事件について、クテシアスはこのように記すが、それはヘロドトスの記述とは異なっている。ヘロドトスがゾピュロスについて記すことを、ゾピュロスの家で騾馬が仔を産んだことを別にして、その他については、クテシアスはアミュティスの夫でクセルクセスの娘婿メガビュゾスがしたこととして伝える。

つまり、バビュロンはメガビュゾスによって征服された⁷²⁾。クセルクセスはメガビュゾスに多くの贈物とともに、6タラントンの重さがある金の碾臼^{ひきうす}を与えた。これはペルシアで、王からの贈物の中でもっとも名誉がある。

69) クセルクセスの子としては、ここに登場する人物以外に、アカイメニデス (F 14. 36-39) とアルタリオス (F 14. 41-42) がいる。

70) このエピソードについては、アイリアノス『ギリシア奇談集』(13. 3 = Ctes. F 13b) に類似を確認できる (ただし、ベリタナスの墓はペロスの墓になっている)。クセルクセスはバビュロンでペロス (パール神) の墓を暴き、オリーブ油に漬けた遺骸が納められている棺を発見した。棺の油は十分に満たされておらず、棺の横には小さな石板が置かれてあり、そこには、墓を暴き、棺に油を満たさなかった者には、善からぬことがあると書かれていた。これを読んだクセルクセスは恐怖を覚え、油を注ぎ足したが、油はいっこうに増えず、クセルクセスは憂鬱な気持ちでその場を立ち去った。

71) ヘロドトス『歴史』(3. 150) では、バビュロンはダレイオス治下に反乱している。

72) ヘロドトス『歴史』(3. 150-160) によれば、反乱を起こしたバビュロニア人たちは、本来生殖能力を有さない騾馬が仔を産むような奇跡が起きない限り、ペルシア人がバビュロンを征服することはないであろうと挑発する。ところが、ゾピュロスの家でこの奇跡が起き、これに勇気付けられたゾピュロスは、奸計によってバビュロンを征服する。

ギリシア遠征とテルモピュライの戦い

(27) クセルクセスは、戦車を数に入れないで80万人の陸軍と1000隻の三段櫓船のペルシア軍を集め、アビュドスに架橋し、ギリシアに進軍した。ラケダイモン人デマラトスは、すでに当初よりクセルクセスに側仕えていたのだが、遠征路でも彼に従い、ラケダイモンに攻撃することを思い止まらせようとした。クセルクセスはテルモピュライにおいて、アルタパノス麾下の1万人の軍勢で、ラケダイモン將軍レオニダスを攻撃した。多くのペルシア軍兵士が殺されたが、一方でラケダイモン軍は2ないし3人が戦死した。クセルクセスはさらに2万人の兵で攻撃を命じたが、ペルシア軍は負けた。そこで、ペルシア軍は戦意高揚のために鞭打たれたが、鞭打たれた者たちも負けた。翌日、クセルクセスは5万の軍勢で攻撃を命じた。しかし、これも成功しなかったので、戦争を中止した。

テッサリア人トラクスとトラキスの有力者たちカッリアデス、ティマフェルネス⁷³⁾が軍勢を引き連れて到着した。クセルクセスは彼らとデマラトスとエフェソス人ヘギアスを招集し、包囲しない限りラケダイモン軍を破ることはできないと知った。2人のトラキス人に先導され、4万人のペルシア軍が難所を通過すると、ラケダイモン軍の背後へ回った。包囲されると、ラケダイモン軍兵士は勇敢に戦って全滅した。

プラタイアの戦い

(28) クセルクセスは、今度はマルドニオスを指揮官に任じて12万人の軍隊をプラタイアへ派遣した。テバイ人がクセルクセスをプラタイアへ向かわせたのである。ラケダイモン人パウサニアスが300人のスパルタ人、1000人のペリオイコイ、その他の国から来た6000人を率いて会戦し、ペルシア軍を力で負かした。マルドニオスは傷を負い、退散した。

マルドニオスによるアポロン聖域の掠奪

(29) このマルドニオスは、クセルクセスによってアポロンの聖域を掠奪するために派遣されたが、クテシアス曰く、大粒の雹^{ひょう}に襲われて死んだ。それゆえクセルクセスは大いに悲しんだ。

アテナイ征服とサラミスの海戦

(30) クセルクセスはアテナイそのものに向かった。アテナイ人は110隻の三段櫓船に乗り込み、サラミスに逃げた。クセルクセスは人気のなくなった都市を征服して、アクロポリス以外の場所に火をつけた。というのもアクロポリスにはまだ何人かが残って抵抗していたのだ。最終的に、彼らも夜陰に乗じて逃れたので、ペルシア人はアクロポリスも焼き尽くした。

73) トラクスは、ヘロドトス『歴史』(9.1; 9.58)においても、親ペルシア派のテッサリア人として登場するが、カッリアデスとティマフェルネスは登場しない。

そこから、クセルクセスはヘラクレイオンと呼ばれるアッティカのもっとも狭い地域へ進軍し⁷⁴⁾、徒歩で渡れるように、サラミスまで土手を積み上げた。アテナイ人テミストクレスとアリスティデスの計画で、クレタから弓兵が呼ばれて参じた⁷⁵⁾。そこで、ペルシア人とギリシア人の間で海戦があったが、オノファノス⁷⁶⁾の麾下、ペルシア軍は1000隻以上の戦艦を持ち、一方ギリシア軍は700隻の戦艦を有していた。ギリシア軍が勝利し、500隻のペルシア戦艦が破壊された。クセルクセスは逃亡したが、これもアリスティデスとテミストクレスの計画と策略によるものであった。残りすべての戦闘で、ペルシア軍12万人が死んだ⁷⁷⁾。

デルフォイの神殿掠奪

(31) クセルクセスはアジアへ渡り、サルデイスへ進軍し、一方でメガビュゾスをデルフォイの神殿掠奪に向かわせた。メガビュゾスが辞退を願い出たので、宦官マタカス⁷⁸⁾がアポロンを侮辱し、すべてを掠奪するために派遣された。彼はこれらを成し遂げると、クセルクセスのもとへ帰ってきた⁷⁹⁾。

クセルクセスのペルシア帰還

(32) クセルクセスはバビュロンからペルシアへ戻った。メガビュゾスは自分の妻アミュテ

74) ヘラクレイオンとはヘラクレスの聖域があった場所だと考えられるが、その位置は同定されていない。また、この箇所は「アッティカとサラミスの間のもっとも狭い海峡」という語を、フォティオスが誤って省略した可能性がある。Cf. J.M. Bigwood (1978), 39-41.

75) ビッグウッドは、ペルシア戦争の段階でクレタの弓兵が島外で活動していた可能性は低く、クテシアスのアナクロニズムが見受けられると指摘する。J.M. Bigwood (1978), 35.

76) クセルクセスの岳父。Cf. F 13. 24.

77) ペルシア戦争の叙述にかんして、ヘロドトスとクテシアスの間には齟齬が多々みられる。人名、数値などを除いて、重要な齟齬としては、クテシアス『ペルシア史』ではイオニア反乱の叙述がない（ヘロドトス『歴史』では、イオニア反乱へのアテナイの関与がペルシア戦争の主要動機のひとつとして考えられている。Hdt. 5. 105; 6. 94）、マルドニオスによる北部ギリシア進軍の叙述がない（Cf. Hdt. 6. 43-45）、マラトンでダティスが戦死している（Cf. Hdt. 6. 119）、嵐によるペルシア戦艦水没の叙述がない（Cf. Hdt. 7. 190）、アルテミシオンの海戦の叙述がない、プラタイアの戦いとサラミス海戦の順序が逆になっている、アテナイのアクロポリスに籠城した者たちが逃れている（Cf. Hdt. 8. 53）、サラミスへの通路が開戦前に築かれている（Cf. Hdt. 8. 97）、マルドニオスが戦死していない（Cf. Hdt. 9. 63）、ミュカレの戦いの記述がない、などの諸点が挙げられる。Cf. J.M. Bigwood (1978), 藤縄 (1989), 397-401.

78) F 13. 24に言及されている有力宦官ナタカスと同一人物と考えられる。フォティオスもしくは写字生の誤りであろう。

79) 『ペルシア史』では、デルフォイのアポロン神殿が2度掠奪されている（F 13. 29; F 13.31）。しかし、クセルクセス撤退後に行われた2度目の掠奪は不自然であり、この掠奪はデルフォイのアポロン神殿ではなく、ディデュマのアポロン神殿の誤りであるとする解釈もある。というのも、ヘロドトス『歴史』（6. 19）ではイオニア反乱の際にディデュマが破壊されているが、カッリステネス（Callisthenes, *FGrH* 124 F 142）では、クセルクセスの治下に破壊されたと伝えられているからである。Cf. J.M. Bigwood (1978), 36-39.

イス——前述したように、彼女はクセルクセスの娘である——が姦通しているという噂を流した。アミュティスは父に注意され、貞淑にしていると約束した⁸⁰⁾。

クセルクセスと王子ダレイアイオスの暗殺死

(33) アルタパノスはクセルクセスのもとで有力であったのだが、有力宦官のアスパミトラスとともに、クセルクセス殺害を企んだ。彼らはクセルクセスを殺害し、息子アルトクセルクセスに、同じくクセルクセスの息子であったダレイアイオスが殺したと説得した。ダレイアイオスが参上すると、アルタパノスにアルトクセルクセスの宮殿へ連れて行かれた。ダレイアイオスは、自分は父親を殺していないと声を大にして否定したが、処刑された。

(以下、次号に継続予定)

(年表)

550/49年	キュロスがアステュアゲスを破る。 キュロスによるアジア征服。
530年	キュロスの死。カンビュセスの即位。
525年	エジプト遠征。
522年	カンビュセスの死。マゴス僧による王位篡奪。ダレイオス 1 世の蜂起。
513年頃	ダレイオス 1 世によるスキュティア遠征。
490年	ダティスによるギリシア遠征 (マラ톤の戦い)。
486年	ダレイオス 1 世の死。クセルクセス 1 世の即位。
480年	テルモピュライの戦い、アテナイ占領、サラミスの海戦。
479年	プラタイアの戦い。
465年	クセルクセスとダレイアイオスの暗殺。アルタクセルクセス 1 世の即位。

D. Lenfant(2004), 338-9を参考にして作成。本表は現在一般的に受け入れられている年代に基づいており、本稿におけるクテシアスの記述とは齟齬をみせる。

(引用文献)

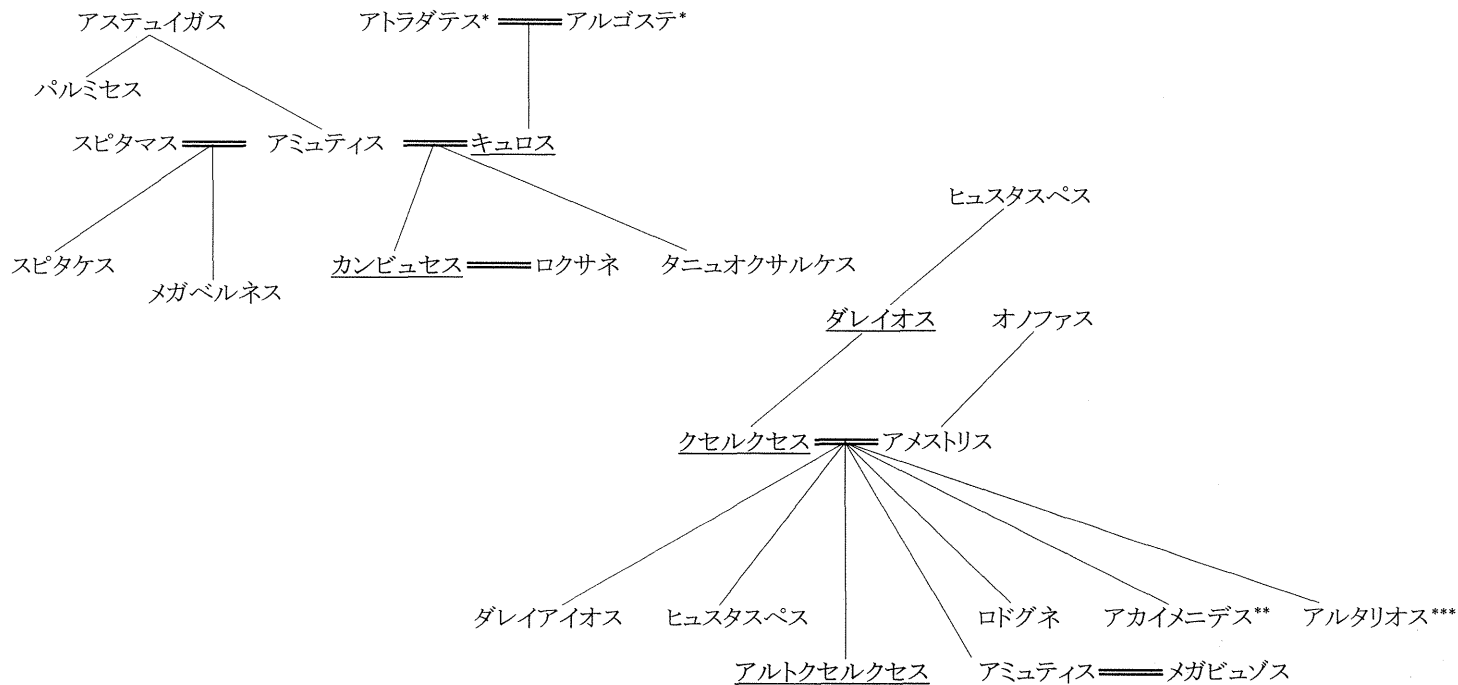
- Bigwood, J.M. (1978), 'Ctesias as Historian of the Persian Wars', *Phoenix* 32, 19-41.
 Bigwood, J.M. (1986), 'POxy 2330 and Ctesias', *Phoenix* 40, 393-406.
 Bigwood, J.M. (1993), 'Aristotle and the Elephant Again', *AJPh* 114, 537-555.

80) ヘロドトス『歴史』(9. 108-113)でも、クセルクセスがアジアに帰還した後、恋愛関係による宮廷の騒動が伝えられている。ただし、ヘロドトスによれば、騒動はクセルクセスの邪恋を発端に、王と王弟間の内紛にまで発展しており(この過程で王弟マシステスの家系は断絶する)、クテシアスが伝えるよりも、はるかに重大な事件として扱われている。Cf. H. Sancisi-Weerdenburg (1987).

- Brown, T.S. (1978), 'Suggestions for a Vita of Ctesias of Cnidus', *Historia* 27, 1-19.
- Dorati, M. (1995), 'Ctesia falsario?', *QS* 21 (n.41), 33-52.
- Drews, R. (1974), 'Sargon, Cyrus and Mesopotamian Folk History', *JNES* 33, 387-393.
- Eck, B. (1990), 'Sur la vie de Ctésias', *REG* 103, 409-434.
- Henry, R. (1947), *Ctésias: la Perse, l'Inde: les sommaires de Photius*, Bruxelles.
- Henry, R. (1959), *Photius: la Bibliothèque*, Vol. 1, codex 72, Paris.
- Jacoby, F. (1958), *Die Fragmente der griechischen Historiker* III, C, Leiden, no. 688.
- Lenfant, D. (1996), 'Ctésias et Hérodote: ou les réécritures de l'histoire dans la Perse achéménide', *REG* 109, 348-380.
- Lenfant, D. (2004), *Ctésias de Cnide: La Perse, L'Inde, autre fragments*, Paris.
- Melchert, H. (1996), *Ktesias' Persika, Books 7-13*, Diss. to Brown University.
- Sancisi-Weerdenburg, H. (1987), 'Exit Atossa: Images of Women in Greek Historiography on Persia', in A. Cameron and A. Kuhrt (eds.), *Images of Women in Antiquity*, London, 20-33.
- Tuplin, C. (2004), 'Doctoring the Persians: Ctesias of Cnidus, Physician and Historian', *Klio* 86, 305-347.
- 阿部拓児 (2006) 「キュロスの帝国とペルシア衰退論——クセノフォン『キュロスの教育』にみるペルシア史像——」『人文知の新たな総合に向けて』(21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」) 第4回報告書, 下巻, 3-25。
- 井上浩一 (1993) 「ビザンツ帝国における古典文化の復興——フォティオス『文庫』を中心に——」藤縄謙三編『ギリシア文化の遺産』南窓社, 137-164。
- 藤縄謙三 (1989) 『歴史の父ヘロドトス』新潮社。
- 森 茂男 (1976) 「キュロスの出生譚」『オリエント』18, 65-79。

(本稿は平成19年度日本学術振興会科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。)

(家系図)



* F 8dに登場。本稿では登場しない。

** F 14. 36-39に登場。本稿では登場しない。

*** F 14. 41-42に登場。本稿では登場しない。アルタリオスはアルトクセルクセスの兄弟として紹介されているが、母親の名は言及されていない。